旅行

文科三年日光旅行

文科三年

十月十七日午前七時上野出發。豫定より後る事一時間餘、正午すぎに一行は日光の驛に下りた。ものしづかな麓の町、名高い杉の並木街道を吊革にぶらさがる無風流な客となつて一氣に馬返し迄來た。いよ〳〵山登り、踏みもならはぬおみ足を草鞋にかためて合羽姿も甲斐甲斐しく我先きに出發す。

秋に似あつた山時雨、はら〳〵と降つては止み止んでは降る空の下を深い霧が立てこめて一間先も見えかねるが輕い氣持の人々は一歩一歩と輕い足を運ぶ。紅葉を縫ふ木の下道は板橋の度に川に出あつて又別れる、靜かな此の山からもこんな大きな聲が出るのかと不思議に思はれる樣な大治川の水の色は青磁だつた。碎けて散るしぶきは橋上に立つ我々の上に迄かゝる。

何でもいゝ、一心不亂にすればいゝよ。

止むに止まれぬ勢で思ふ存分やつてのければそれでいゝよ、美くしい涙の花は末の末だ。

川は私に教えてくれた、登るに從つて霧は晴れてうすく日さへ照つて來た。雨に濡れた木々の葉に日の當るのが美くしい、つゞら折の道の角で色さま〳〵の紅葉と深い底の水の流れとを見た時お菓子の樣だなと思つた。日光のお山はほんとにきれいすぎる。華嚴への近道と立札されたあたりから紅葉は急に色が濃く梢も密になつて來た。人の心を刺す樣な瀧の音は瀑布を見ない先にもう我々を呑んでしまつた。大きい力に魂をぬかれたぬけがらはたゞ茫然と瀧の前に並んでつつたてゐる。辛うじて我に歸つた時は全身しぶきでしとどになつてゐた。瀧は水ぢやないらしい。どうしても水とは見えない。微細の玉がさま〳〵の彩を見せつゝ狂ひ落ちてゐると強いて云へば云へようがしかしあの力はどこから出るのか知らない。死とか生とかは考へないでただあの上から落下にのつて落ちられるものなら落ちて見たいな、と思つた、いつ迄もこの強い力に打たれて居たいなとも考へた。華嚴もやはり豫期以上のものだつた、いや豫期などの出來るものぢやなかつた。間もなく中禪寺湖に來た。こんな山の頂上によくもこんなに水が溜つたものだ、と思ひながらお茶を啜つて新らしく湯本に向けて第二の行軍を續ける。靜かによどんだお山の水に沿うた紅葉の下道は實にいゝ。ひた〳〵と寄せる深藍色の涙は小さいけれど水の底から出る湖の鼓動にちがひない。あゝこの穩かさがやがてあの瀧の大きい力を養ふ原になるのだらう、しづかに瀧の上迄辿んで行つて急轉直下まつしろの玉と碎け散るのだらう。

道はいつしか湖をはなれて紅葉の中に分け入つた。右も左も上も下もすべて紅葉だ。さくさくとふむ落葉の音に聞き入りつゝだまつてみんなは進んで行つた。秋の音がする。秋の香がする、もみぢと秋が私の心で一つになつた。作文などが出てゐたら、白紙で出すに限るね。先頭の下田先生が低い聲で仰つしやつた。ほんとにやつぱり沈默は說話より貴い。一行をつゝむ紅葉の梢がしだいに疎になつた頃戰場が原へ出た。目先が急にかはつて廣々とひらけた末の山の峽が目指す湯本だと教えられる。可成廣い臺地だ。所々にある灌木林が山の頂らしい感じを與へる。こゝで昔神樣が戰爭をなすつたんださうな。時はもう五時すぎにもなつたらうか、秋の日は大分たそがれて雨さへぽつ〳〵降つて來た。夕暗と共にしのびよる或るさびしみをわざとまぎらす樣に大きい聲で歌など歌ひつゝ又山路へかゝつた。もう一息と互に勵まして行く所に宿から迎への提灯が來た、急に旅人らしい氣持になりつゝ、湯瀧も音ばかりを開いて湯本へ着いたのはかれこれ六時半頃であつた。

湯本の町は我々のこの浮き立つたよろこびを容れるにも堪へぬほどの靜がさだつた。快い溫泉がすべての旅人を抱いてくれる中に山の夜はしだいに更けて皆めを樣な靜肅が騷々しい一行の室を襲つた。

夜が明けても山は靜かだつた。溫泉場の香とこのしづけさから離れて行く事がしみ〴〵と名殘惜しくて思ひ〳〵に朝の散歩を恣にした。程近い湯湖を舟で漕ぎまはつた人々はすべての人から恨まれたらしかつた。再會を期しながら古めかしい山の町を出發したのは丁度九時。途中の湯の湖も湯の瀧も昨日以來嘆美になれたこの目をさへ失望させなかつた。山の紅葉に日がてり映えて耀く姿をそのまゝ水にうつした景色はどの位一行の足をにぶらせた事だらう。

戰場が原で白樺の皮をとつた。

又山へかかつた頃から雨がぽつ〳〵降り出したが降つても照つても紅葉は好い。中禪寺湖を舟で渡つた、霧が深くたちこめて對岸は見えぬがぐるりと秋の錦で包まれた湖の幸を人の事の樣に羨んでも見る、うつむいて一心に湖の面を眺め入つた、何といふ水の色だらう、この湖にのみ與へられた獨特の美として永久に誇りもし讃へられてもゐるこの色を美くしい山の血の色だらうがとも考へた。あゝこの水があの瀧となるのだ、なほも流れてあの大谷の清流をなすのだ、美くしい紅葉と水に育くまれた山の空氣は清からう、清い空氣を戰かす歌のひゞきも特別にきれいに聞える。濱についた。宿の二階からあらためて湖を眺めわたさうと緣に出たら、湖も山ももみぢも岸も皆一面の霧の海で秋雨がしと〳〵と煙つてゐた。

その夜しづかな雨の音を聞きつゝ級會をした、どてらの先生の歌のお聲と日光の山とは離れられぬ聯想となつて一同の心に殘つた事だらう。あく迄も靜かさを教えるこの旅の最後の夜だ。一事一事がすべて一生の思ひ出となるこの一夜は寢るもよからう、話すもよからう、考へるもよからう、うたふもよからう。よもすがら雨の音とかすかな寢息と話し聲とが入りまじつて聞えてゐた。

朝、さし出でた日の光に紅葉の山は陰陽すつきりとそめわけられてあかつきの湖に水鏡してゐる姿が先づおどろきの目をみはらせた。その鏡の面は朝の微風に小波たつてさゝやかなよろこびの聲をあげて居た。虹が、と云ふ友の叫びに見上げれば、まこと、天空に懸かる大きな浮はし。人々は又沈默にかへらなければならなかつた。

午前九時宿を立つた一行は湖の上から吹いて來る冷い風を最後の名殘として見返り勝に山を下りた。

東照宮

夢に見る虹の樣に、龍宮へ懸る橋の樣に、白い雲のやうな深い秋

霧の中に朱塗の神橋が浮んでゐた。

ほんとに酷い霧だ。午後一時にも近いのにまるで夜明の樣に茫やりしたあたりである。

宮の内へ入ると、大きな紋の黑木綿の羽織の案内者が先に立つ。薄墨色に濡れた小石を踏んで、楢から霧を吐く古杉の兩側に竝び茂つた中を行けば胸は躍るのである。未だ見ない結構といふもの、喧傳せらるゝ華美、日本の贅のきはみの建築、物心がつく頃からきかされてゐた、翹望してゐた、それを今まのあたり見やうとするのだ。

元和二年の昔、大棟梁甲良豊後宗廣、其子宗次及び幼少ながら其の孫宗賀、父子孫三代の腦を搾つて成つた堂廟の建築及び美術的價値は既に究め盡くした後である。今やかの興味にこの期待に、一歩踏み入れてまのあたり見ると云ふ一事が殘つてゐるのみだ。そしてその五重の塔は、おゝ！既に現はれた。

大きい、高い、美しい、立派だ。朱塗りの間に金色が光る綠りの色は彫刻のひとつ〳〵に入れてある。あゝけれども私は言葉を惜まなければならない。私は言葉に貧しいそしてこの奥にどれだけの驚くべきものがまだあるのだ！、私は黃金を履にする蓬萊の國から來た人の樣に、美に對して鷹揚に、華に對して冷淡を裝はればならない。そう思つて讃歎を呑んで奥へ進む。胸は少しどきゝくして居る。

突當つて仁王門がある。その右の横から下神庫が見える。門内を鈍角に折れて右に三神庫左に厩舍がある。厩舍の猿の彫刻は覺えのあるものである。建築學上から云へばこゝは右が勝ち左が負けて居るが遙かに五重塔が左を援けて重くしてゐる、左右不均齊の調和は注意すべき價値がある。しかし私はまだ辭を費さない。厩舍が馬のためには心の憧えるほど惜しい彫刻ではあつたけれども。突當つて水盤舍には澄透した水が湧いてゐる。この下に入つた時、私の心は小さい聲で吁つと云つた。私は吝しむけれども呈さなければならない。ほんとに奇麗である。きらびやかである。すべて人工と黃金に驚かされる。時などは何物でもない樣である。金色銀色丹青白線、おゝでは白も色である。この中に湧く水は今朝私が顏を洗いで來たのと全く同じ水であらうか。常に貧しい自分の書齊が念頭に去らない胸には、冷々淡々として流れる水に物心のないと云ふ事が物足りなかつた。

水盤舍の隣りに輪藏がある。右側の神庫に對して稍左右均齊となつたのである。屋根裏の細かい彫刻にまで洩れなく眸を光らせながら大きく頷いて石階を昇る。

霧が深いので近い所も奥行き深く影が翳されてゐる。狹い場所に溢れる程に建てられた神廟にとつては何といふ幸であつたであらうまた見る私共にしても同じである。石階を昇ると前、左、右。龍宮に來たやうである。餘り高い屋根も深い奥も霧で閉されて、見えるのは浮いた樣な左の鼓樓右の鐘樓、そして正面に耀くやうな陽明門私の心は大きく吁つと叫んだ。直ぐ走り寄らうとする氣持を靜かに抑えて、私は緩り觀照しなければならないのだと自らにまかせる。案内人のすげなく横へそれて本地堂へと導くのを、掌に入つた玉を愛でる心地で門を横ににらみ乍ら從つてゆくと、霧に濡れた廊下を靴を脱いで入つてゆくのである。薄暗い内陣で人が盛に手をうつ聲が

するので訝り乍ら入ると、天井に大きな龍の繪が畫いてあつて僧が此下で手を打つと上の龍が鳴くと云ふ。試みに一人拍つと「朗」と響く。皆面白がつて一時に幾つも手を拍つたので何だか解からなくなつたら僧が一人づゝでなくては駄目だと云ふ。自が獨り眞中に立つて撥々と二度ほどうつと朗らかな聲が「朧。朗。」と聞えたのも嬉しかつた。祀れる藥師諸佛、諸具の立派さ裝飾の見事さは云ふを得たない。堆朱の樣に色の好い廊下は吹きこむ狹露に露が滴つてゐる。

今度は正しく陽明門の前に立つた。三門樓門入母屋四方軒唐破風造りの複雜な屋根の形は左右の廻廊の一と間毎に意匠を竭した花鳥其の他の彫刻極彩色のあでやかさ。全部丸彫で透し彫になつてゐる美くしい色と秀でた技巧とに、一本一本細かく畫かれた鳥の羽毛にまで精が籠つてゐる樣な氣がする。柱の上軒の廻り、羽目の中要飾り、一分として彫刻のしてない部分はなく色鮮やかに七寶のかゞやかぬ隈はない、扉の裏の牡丹の蒔繪の巧みさ、全く驚歎して雨露にあらはなのを惜しまずにおけないのであつた。時を急いで先へゆく案内者に引づられる樣に、滑る樣な朱塗の西廻廊を傳つて拜殿に入る。その前の唐門は、陽明門の綺羅びやかなのに引かへて白を以て大体の色とし、その中に燦とした金金具が輝いてゐる、思ひ切つた妙な曲線を使つた唐破風である。そして扉の上の楣間には陽明門と同樣に人物の彫刻がある。柱と楹には唐木の象眼で龍梅竹などを鍬め込み、控柱には菱花形の彫刻が一面について居り木柱と、その間の羽目には一枚板から精巧な草模樣が彫り崩してある。見る眼も疲れて拜殿の稍暗い所に座して僧の説明をきく。そしてまの當り見るのであるが實に複雜したものでまた精巧華美を極めたものである。

もし物質的に天國だの極樂だの或は龍宮と云ふ樣なものが表象化されたら至善至美と云ひまづこんなものであらうと思はれる。極彩色生彩色唐繪彩色、密陀彩色、高蒔繪、半蒔繪、梨地、金具に七寶を鏤め透彫をし美術の極致が盡されてある。印象が少し交錯し混雜して來た樣だ。

將軍の間の木象眼の桐と鳳凰は優秀なものである。これに向つて座した時、薄暗い室は靜かな心持に沈ませて、將軍御成のあつた時の氣持などを思つて描いて見るとこの疊、この柱、實に恣な空想の許された世界である。捲き上げた簾重くたれた總、暗いために明瞭しない襖の繪の重々しさ、何と云ふ壯嚴な優美な中に身はあるのであらう。表はされぬ感激が胸を衝いて來る。門主着座の間も將軍の間と同じ樣である。こゝで東照大權現御守を買ふ。

どんな僅かな一物にも鉋くことなく貪り見つゝのろい一歩一歩と時に押されて拜殿を出た。神輿舍の前を通ると薄化粧した老巫女が純白の絹の衣裳でつゝましく座してゐたのが皆が雨の樣に投げる賽錢にやたら起つて鈴を振り繪扇をかざして一さし舞ふ。冬の月を見る樣な冷たい妖艶である。坂下門からは時間がないので奥の院へゆかず猫門の眠猫を一心に見詰めた。觸れなば散らん牡丹花の中に安らかにうまいした小猫である。たゞ私は思つたより小さいのが意外であつた。再び陽明門の下をくゞる時は龍宮へゆく乙姫を思つて見る。全くこんな美しい一劃がこの世に、今日も明日も夢の樣に消えもしないで正さしくあると云ふ事が不思議な奇蹟の樣である。きつと學校へ歸つて又堅い黑塗の机に向つたならば夢と同じ樣なまぼろしの影になるであらうけれども、またそれほど不思議ともしないであら

うけれども、ともかく今、まの當り、この樣な言語も盡さない鐘美の一域に一分時でも住んでゐて、空想にしろ刹那でも將軍家や乙姫の心持を體したと云ふことは私の一生の記錄に殘してもよいことであらう。

足尾へ

日光は遂に去る日まで雨の日光だつた。午前八時、一行は舟を出して中禪寺湖を阿世潟へ向ふ。波は高かつた、命の惜しい人は青い顏してゐた。動くと覆へる。舟底にたまつた水は、座の上まで浸してゐる。中禪寺湖から阿世潟まで、水にしたつて座つたまゝの身うごきも出來ない小一時間、しびれのきれたのはつらかつた。石の上に三年ゐた人につく〴〵同情する。舟の横腹を打つ波が散つては、みんなの頭から顏から無遠慮にあびせかゝる。心頭を滅却しても水は仲々冷たかつた。それでも、湖の中へ放り出されるよりは上乘である。一同は身うごきもしなかつた。

ふと、後の方で西村先生の御謠が始まつた。中途で切れて薩摩琵琶になる、次に詩吟になる。青くなつてゐた一同もつり出されて歌ひ出した、うたふといふのか、うなるといふのか、どなるといふのか、その邊の言葉には不案内だが、板一枚の下は地獄であつた湖上がたちまち、虚空に花ふり音樂聞ゆる天人の舞殿と化したのである。

もう動いてもよしと、船頭から許しの出た頃は、動かうにも動かれぬ位しびれてしまつてゐた。

「足尾の烟毒で、あれです」と船頭は言つた。あゝ此岸のみじめさ秋半ば織りなしたにしきは對岸、此岸は冬がれした木枯のすさぶ立木である。

と、ふと鼻をつく嗅ひがある。

「あの臭ひは何ですか？。」

「煙毒の臭ひです」船頭は得意然と答へた。

煙毒の臭ひ？　舟はコトンと音がして、靜に岸へつく。

これから足尾への峠越しである。上り八町、下りは三里、いさゝか慣れたが自慢の一同には、八町の山のぼりは何でもなかつた。某の草鞋のかゝとのわく〳〵と口あくのを笑ひ止めた頃はもう峠の茶屋にかけてゐた。下りの三里は骨である。丸木橋を渡り、谷川の岩を飛び越えて行く位は体操を習つてゐるみんなには、何の事でもなかつたが——丸木橋は平均臺の應用、岩を飛ぶのは三歩前進高飛びの應用——連日の雨で道がすべるのには困つた。足の拇指に力を入れて歩くと、すべらないと聞いた。

けれど、それさへこゝではきゝめが無かつた。ウンと力を入れたまゝでツルリと苦もなく滑つた。

煙毒の臭ひは、ますゝはげしくなつた。

坂はあと二里、滑らない樣に。滑らない樣に。

□冬　文　一

屋根も道も眞白く霜に被はれて人通りの極めて少ない町を未だ明け切れない灰色の空が寒く冷く被ふて居る。柳の枯葉が舞ひ落ちる、練瓦塀の上に止つた烏が仔細らしく小首を傾けて居る。それを十二三の手も頰も眞赤にした男の子が、赤ちやんを負んで默つて見上て立つて居る。子供にも烏にもないらしい冬が通りすがりの私の心に在た。

雜報

1. 七月三十一日午後一時から、講堂で在京の文科會員が、折から講習や何かで在京中の卒業生諸氏をお招き致しました、菅原先生の衣服の話（別項）及錦畵に就いての講演が御座いました。

御忙しいところを下村先生、細田先生、岡田先生、高橋先生等お越し下さいましたし、また卒業生の方々はお揃で押しかける樣においで下さいました。講演後も其處此處に卓子を圍んで先生方を中に、大方薄暗くなる迄麥湯などを汲んでうちとけたお出で遊ばすのを、幹事たちは泪ぐましい程嬉しく思つて眺めて居りました。ほんとによい企だつたと存じます。

2, 暑中休暇の中に一度在京の者が寄りあつて、靜かな木蔭に暑さを忘れながら、先生方のお話を伺はうといふ相談が、かれてありましたが、垣内先生にお願ひして、八月廿一日の朝植物園でと定りました。當日集りましたのは十人程で、それに河崎先生、千葉先生も御見えになりました。正面の坂を登つて左の方へ、まつすぐに通つた道の奥、軟かい草がなつかしい香を漂はせてゐる原を行きつめた處の、蔓梅もどきの棚の下にベンチを並べました。お話しの題は「歐洲近世の思潮と、その我國に及ぼせる影響」といふのでしたが其の外何くれとのお話を伺う中に、國語を敎へようとする者の用意といふやうな事が、しみ〴〵考へられました。又、河崎先生、千葉先生のお挿みになつたお言葉も、私共にはよい敎へ草と思はれました。

雲勝ちの空の下に、日光の威壓をしばしのがれた木々は思ふさま葉をのばし、そのかげからは、蟬の聲が、ゆるやかなメロディをなして流れて來ます。綠の蔭のそゞろあるきに、午近くまでの時を過して別れました。

3. 臨時會、九月二十三日午後二時より八時まで、田邊尙雄氏を聘して、蓄音機入りで西洋音樂史の御講話を願ひました、隨分盛況でした。

4. 例會、十二月一日午後二時より、

一、作文朗讀　一年　丸山ひさえ
二、現代日本畫の傾向　四年　篠崎益枝
三、其詩暗誦　二年　河原セイ
四、列强國歌につきて　四年　吉田キヨ
　國歌の發表は次號に　志田登代

おしらせ

一、例會　二月初旬
　校長湯原先生を煩して御話を伺ひ且敎育及敎授法に關する會員の研究を發表いたします。
　會員賛助員の皆樣御來會下さい。

本學期の研究は音樂繪畫に關してでありましたから、本號もそれに因つて編輯致しました。